巻　　頭　　言

長崎短期大学　学長
安部　　恵美子

３月 11 日の東日本大震災と、それに続く福島原発事故がもたらした、甚大な被害を前に、私達は犠牲になられた方々のご冥福とこの大きな試練からの一日も早い復興を祈らずにはいられません。

被災地の短大や大学に在籍する学生や教職員の皆様の、今もなお続く不自由な生活に思いをはせながら、九州の私達にできることは何かを考えています。

震災によるダメージや、原発事故がもたらした風評被害と電力不足等による経済不況が懸念される中、18 歳人口の減少による入学志願者の減少や、入学してくる学生の多様化の中での教育の質保証への要求の高まり等、日本の高等教育を取り巻く環境も年々厳しさを増すばかりです。

短期大学が 21 世紀の「知識基盤社会」「生涯にわたる循環型学習社会」を実現するための地域密着型の高等教育機関であるためには、教育内容や方法のさらなる向上・充実への組織としての取組みが求められます。とりわけ、教員の資質の向上、すなわち、教員の教育力、研究力、地域連携力の涵養は最重要課題です。しかしながら、われわれ教員の日常は、短大教育課程の特性や学生の資質を反映して、授業運営や学生指導の「教育」活動のウエイトが高く、「研究」に割く時間を確保するのが年々困難になっているのです。

高等教育機関である短期大学の目的は、「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は、実際生活に必要な能力を育成」することであります。学び続ける主体としてのモデルを教員が示すことは、学生の自ら学ぶ姿勢の確立を促すことにつながります。ゆえに、教員の教育力と研究力は決して相反するものではなく相乗効果をもたらすものとして捉えなくてはなりません。

また、研究の成果については、学生、同僚教員、関連分野の研究者集団、さらには、地域のステークホルダーに幅広く公開し、関係者からの指導や批評を真摯に受け止めることも必要です。

先生方の忙しい学務の間を縫っての執筆活動への取組に、教学の責任者である学長として、心より敬意を表したいと思います。収録された論文は、アカディミックな内容のみならず、短大の教育活動の中で積み上げられた実践研究の成果も数多く報告されています。ここに発表した研究内容の今後のさらなる発展・拡大を心から期待します。

最後になりましたが、なかなかはかどらぬ原稿の集約状況に心を砕きながら、編集作業に携わっていただいた紀要編集委員諸氏のご尽力に感謝申し上げます。

平成 23 年３月　　学長　安部恵美子